

## 平和の原点・ISの原点

今月号は高校生へのメッセージを変更して私が思いつく原点について記します。

### (1)はじめに

「1937」(辺見庸著)を読み始め、日頃自分が考えていることがそのまま表現されている文章に出会って、又その多さに驚きながら、愚鈍な吾も学者並に考えることもあるのだと少し自分を見直しています。同時に滝沢陽一先生のことばを想起しています。

「我々が考えていることは、理科系は別として、誰かが何処かで既に言い表している。自分は独創と思っている、あるとき先見者に出会ってガッカリもするし、同調者を得て安心することもある」(大概のことは旧新約聖書に書かれているのです)

私はこの恩師のことばにかなりの影響を受けており、文章にするときは慎重になり、比喩的表現が多くなっています。

「1937」の序章は次の引用文で始まっています。(p24)

「それでは、時間とはなんであるか。だれもわたしに問わなければ、わたしは知っている。しかし、だれか問うものに説明しようとする、わたしは知らないのである」(聖アウグスティヌス『告白』第11巻14章)

「ことあらためて尋ねられなければ、何となく知っているつもりでいたことも、突然、問う者がいて、いざそれに答えようすると、実はあまり知らないことに気づく。結果、うまく答えられない。己にだろうと他者にだろうと、問うということは大変なことだ。――中略――

発問をためらわせるなにかがある。問われる者のことをあれこれと忖度する。忖度はこのクニでは美德とされている」(p25、原文はひらがなが多く読みにくいので漢字に転換してあります)

私が歴史を高校生に話し始めたのは「今更、誰にも聞けない」ことを自問し自答したいがために始めたことです。

「1937」（イクミナ）は標題から連想出来るように昭和12年に起きた歴史を詳細に伝える歴史書です。来年の3月号には詳しく紹介できると考えています。

## (2)平和の原点

そもそも意味のない問いかも知れません。平和であった時代が歴史のどこにあったかを探すのは大変です。

戦争を語る方がはるかに容易なことです、ごく少数の人がこの問いと格闘して歴史を学び、古典を繙き、現地に赴いて命を落としています。その冒険心を起こすのはこの「そもそも論」がいつか実現するかもしれないという淡い期待を情熱に変換する力を持っているからです。

国際連合本部前の広場の壁に有名な預言者イザヤのことばが刻まれています。

「彼らは剣を打ち直して鋤とし

槍を打ち直して鎌とする。

国は国に向かって剣を上げず

もはや戦うことを学ばない」（旧約聖書イザヤ書第2章4節新共同訳より引用）

その動作も象徴的な彫刻として建立されており、ニューヨークの名物の一つとなっています。



イザヤはBC740年頃に活躍した偉大な預言者ですが、イスラエルはBC928年に南北に分裂して、722年には北イスラエルはアッシリアによって滅ぼされていました。イザヤ活動の後586年にはバビロニア捕囚、ネブカドネザルによってエルサレムの神殿が破壊されます。

滅亡の危機の中でもイザヤは叫んでいたのです。

イザヤ書第2章には「終末の平和」と書かれており、次のようなことばで始まります。

「アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて幻に見たこと。

終わりの日に、主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち、  
どの峰よりも高くそびえる。

国々はこぞって大河のようにそこに向かい、多くの民が来て言う

『主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。主はわたしたちに道を示される。  
わたしたちはその道を歩もう』と。

主の教えはシオンから、御言葉はエルサレムから出る。

主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。

彼らは剣を打ち直して鋤とし、

槍を打ち直して鎌とする。

国は国に向かって剣を上げず、

もはや戦うことを学ばない。

ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。

神学的な解釈は私には出来ませんが国際連合発足時の当事者には、終わりの日ではなく、もっと早くこの現実の世界で平和を実現したいという心情があったことは記録に留めておきたいことですし、世界の多くの人に知ってもらいたいことばです。そして、「国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」と現実の世界で憲法に歌い上げたのが、今の日本国憲法です。

### (3)テロの思い出

私は旅行中に4度テロ現場の近くにおり、傍観者ですが影響は受けて緊張感を味わっています。パリが連続してテロに狙われたことは過去にもありました。その一つが1986年8月末、滝沢陽一先生と二人で「ある役割」を果たすためにイスラエルに向かう途中に遭遇しました。当時ヨーロッパ周りでイスラエルに入るルートを選択肢は少なくパリ経由が便利でした。「ある役割」は突然にやってきましたので乗れる飛行機を懸命に探しパリで一泊してテルアビブ行きの飛行機を待つエア・フランスになりました。テロはその夜に起きていたのですが疲れ果てサイレンの音の意

味が分からずに寝てしまいました。翌朝、滝沢先生の案内でパリの街を散歩し始めて数分の所にテロの残骸がまだくすぶっていました。滞在したホテルから数百メートル以内でしたが「ある役割」で頭が一杯であったため恐怖は感じませんでした。規模は大きくはなかったのですが当時のテロの目的はイスラエルでしたから テルアビブへの出国手続きは一段と厳しくなり数時間を要しました。

乗客の安全の為にとられる厳重なチェックは私たちには安心感を与えてくれますが、特別室に通され手荷物に火薬は入っていないかを警察犬が何度も私たちに近づき匂いをかぎます。沈黙してじっと待つのも緊張感が漂い疲れます。私はこんなことを13回繰り返してきましたが、多国籍の人々と狭い部屋で緊張感を共有するのは不快ではなく、共存の可能性を感じて興味は尽きませんでした。テルアビブの空港は今ではベン・グリオン国際空港と言いますが当時はまだロッド空港と呼ばれており入国審査近くには**大きな時計**が時を刻んでいました。

在イスラエルの日本大使館の係員に出迎えられ近くのホテルに一泊して「ある役割」に向かいました。案内をしてくれた場所はワイツマン科学研究所の分室と記憶しています。そこに「ある役割」と対面することになり、滝沢陽一先生が窓からのぞき込んで「イエス」と答えたのは1986年8月29日テルアビブのホテルで急逝された佐藤邦海牧師（83歳・ヘブライ語を学ぶ目的で一ヶ月前に入国）の遺体でした。テロの影響は遺体の移送にも及び棺は2国間の係員に厳しいチェックを受けその後日本国の封印を8カ所くらい貼られエアポートに運ばれました。それがいつ飛行機に乗せられるかは分からないという状態で数日以内と告げられ重苦しい中にも滝沢先生は私のことを気遣ってくださって死海まで連れて行ってくださいました。二日後スケジュールが知らされ出発のエア・フランス便が決まりましたが棺は24時間「野ざらしにされねばならない」という規制にかかり全ての貨物便と同様に空港の端に集められ爆発しないかをチェックされました。搭乗者も同様にチェックを受けパリを経由で羽田に到着しました。この旅で私が最も感動を覚え今も忘れることができないことは最後の棺の受け渡しに際しての滝沢先生の態度でした。霊柩車に乗せられた遺体を見守り、「君は疲れているから電車で帰りなさい。わたしはこの車で帰る」と言われ運転席の隣に乗られました。聖職者としての毅然とした態度に心が深く揺り動かされました。

#### (4)自爆テロの始まり

モーセの十戒には「殺すなかれ」とあり、これは自殺も禁じていると教えられています。イスラム教も旧約聖書の教えは継いでいますから自爆という手段でテロを起こすということはもともと無かったものです。原理が何処で変わったのか？

それは1972年5月30日イスラエルのロッド国際空港（現・ベン・グリオン国際空港）で3人の日本人が起こした乱射事件にあります。

襲撃の概要をウキペディアから引用します。

### ①テルアビブ空港乱射事件

犯行を実行したのは、日本赤軍幹部の奥平剛士（当時27歳）と、京都大学の学生だった安田安之（当時25歳）、鹿児島大学の学生だった岡本公三（当時25歳）の3名である。

フランスのパリ発ローマ経由のエールフランス機でロッド国際空港に着いた3人は、スーツケースから取り出したVz 58自動小銃を旅客ターミナル内の乗降客や空港内の警備隊に向けて無差別に乱射し、さらに、ターミナル前に乗客を乗せて駐機していたエル・アル航空の旅客機に向けて手榴弾を2発投げつけた。

この無差別乱射により、乗降客を中心に26人が殺害され<sup>[2]</sup>、73人が重軽傷を負った。死傷者の約8割が巡礼目的で訪れたプエルトリコ人であった<sup>[1]</sup>。死者のうち17人がプエルトリコ人（アメリカ国籍）、8人がイスラエル人、1人はカナダ人であった。犠牲者の中には、後にイスラエル大統領となるエフライム・カツィールの兄で著名な科学者だったアーロン・カツィールも含まれている。

その後、岡本は警備隊に取り押さえられ、奥平と安田は死亡した。2人の死について、「奥平は警備隊の反撃で射殺。安田は手榴弾で自爆した」として中東の過激派の間では英雄化されたが<sup>[3][4]</sup>、詳しくは判明していない<sup>[5][6]</sup>。

なお、計画に携わっていたとされる檜森孝雄の手記によると「当初の計画では空港の管制塔を襲撃する予定だった」としているが、警備が厳重な管制塔を3人だけでどのように襲撃するつもりだったのかなど具体的な計画は不明である<sup>[7]</sup>。

### ②何故彼らがこの事件を起こしたのか？

事件の経緯

#### サベナ機ハイジャックの失敗

1972年5月8日に、パレスチナ過激派テロリスト4人が、ベルギーのブリュッセル発テルアビブ行きサベナ航空のボーイング707型機をハイジャックしてロッド国際空港に着陸させ、逮捕されている仲間317人の解放をイスラエル政府に要求した（サベナ航空572便ハイジャック事件）。

しかし、イスラエル政府はテロリストによる要求を拒否し、ハイジャックしているテロリストを制圧し、犯人の内2人は射殺され、残る2人も逮捕された。93人の人質の解放に成功したものの、乗客1人が銃撃戦で死亡した。

#### PFLPと日本赤軍の協力

そこで、パレスチナ解放人民戦線（PFLP）は「報復」としてイスラエルのロッド国際空港を襲撃することを計画した。だが、アラブ人ではロッド国際空港の厳重警

戒を潜り抜けるのは困難と予想されたため、PFLPは日本赤軍の奥平に協力を依頼し、日本人によるロッド国際空港の襲撃が行われた。

なお事件発生時点では、まだ首謀者たちの組織名称は流動的であり「日本赤軍」とは名乗っていないので、「日本赤軍の前史に属する事件」ともいえる。

(引用の赤文字変換は小原による)

この事件はテロリストが無差別に一般市民を襲撃したこと。  
実行犯の一人が自爆したこと。

### ③ジハードの誕生

自爆が「正義のための死」と解釈され「ジハード」という言葉ができたようですが「ジハード」は「ムジャヒード」(戦士)と「シャヒード」(殉教者)の結合語のようです。これらの研究は1972年から10年の歳月をかけて研究され、実践されたのは1983年ヒズボラ(神の党)によるイスラエル南レバノン侵略攻撃でした。研究者は自爆を「カミカゼ」と考え、自殺攻撃を正当化して受容したのはシーア派だったと発表しています。それが急速に拡大され9・11にも繋がり今日のISに至っています。切腹を潔いとする日本から特攻精神が生まれ、戦いを学ばないという憲法を生み出した日本という国は実に不思議な国だと私は思います。

### ④にもかかわらず

イスラエルを訪れる度に目にする「記憶の時計」にわたしはある種の罪悪感を感じ自分にできることを考え続け「平和を祈る・念ずれば花ひらく303番碑」を献碑したり、ダビデ3000年祭には245本の苗木を心ある皆さまの協力を頂いて献苗してきました。そして愚かにも「主の教えはシオンから、御言葉はエルサレムから出る」と心のどこかで信じているのです。然し、2000年から壁の建設が始まり、壁のあるイスラエルは見たくないの思いがあって足が遠のいています。

日本の世界へ及ぼす影響は小さくありません。ISの無差別自爆テロの戦術を意識せずして輸出した日本が今、できることは「戦いを学ばない憲法」を守ることだと私は考えています。